

10月26日の報告です

10月26日「平野高校を廃校にしないでください」要望書と皆さんから寄せられたメッセージを届け、約1時間交渉を行いました。

教育委員会から、大久保宣明教育振興室長、播中力再編整備課長、川口賢二首席指導主事、浦久保知佳指導主事が出席。隈元悠太毎日新聞記者傍聴。

まず、平野高校の後援会会長の奥田さんが要望書に沿って、平野高校の歩みと同窓生や、学校関係者の思いを伝え、教育委員会通知の再検討を要望された。元PTA会長で現学習支援員の岡山美保子さんは保護者として、また、学習支援員として10年間平野高校の実態を見てこられ、特色のある平野高校を絶対になくさないで欲しいと訴えられた。更に元PTA会長石山優子さんは、長男の学校も以前統廃合にあい、今回二人の息子達の学校も廃校の見通しで、母校を失う同窓生、保護者の悲しみを涙ながらに訴えられた。現PTA副会長和田美樹さんは、子どもの入学後心配はあったが、寄り添って頂いた先生方のお陰で、コロナ禍にもかかわらず、楽しい学校生活を過ごしていると報告された。

以下、やりとりの概要を報告します。

(教育委員会の見解)

「中学校の卒業生数が減少する中、同校では、平成31年度以降4年連続して入学を志願する者が定員に満たない状況が続いており、小規模化が進んでいる。また、同校の在籍生徒の主たる居住地の行政区（大阪市平野区、松原市、八尾市、羽曳野市、藤井寺市）における今後の中学校卒業生が減少傾向にあることから、同校を志願する者の数が見込めない状況になっている。」

「平野高校の特色ある取組を松原高校に継承・発展させる機能統合を実施する。」
「その上で、様々な意見を踏まえ、令和4年11月の教育委員会会議において最終決定する」

(教育委員会とのやりとり) 概要

Q 8月29日の通知の前に、学校側と再編整備の話したのか。

A 再編整備課としては話をしていない。

Q 平野高校の選定理由は何か

A 定員割れと人口減少

Q 定員割れ即対象ではない、「改善の見込みがない」の判断は

A 定員割れと人口減少

Q 3年に及ぶコロナ禍、休校、行事の中止、3年間マスク生活をよぎなくされた生徒、教員等の気持ちは考慮されないのか。

A 一切考慮しない、どの学校も同じだ

Q 教育委員会作成の資料を示し、過去10年間の中学生の卒業生数は減少どころか前半5年間はむしろ上昇し、平成21年度と31年度は同程度だ。一方で、定員割れは毎年増加し、令和2年43校になっている。この原因は、平成24年「今後10年間、公立高校を15校程度統廃合の対象にする」の府の方針に沿ったものでは？

A 府の方針に沿って行っている

Q 平野高校の40年間の卒業生者数の変化を示し、環境・人間福祉コースを設置した1995年から、2010年まで、生徒減少期にもかかわらず増を続け、8クラス定員になった。2006年から2010年30人学級の実施により転退学者を劇的に減らし、元橋下知事が「素晴らしい学校」と評価。当時、エルハイスクールには約1千万円の予算がついた。

Qエルハイスクールのような一部の学校に重点投資し、不平等ではないか
Aどの学校も同じような予算措置をしている。

Q 評価された平野高校が、10年後廃校になっていいのか。平野高校はコロナ禍前まで、定員割れの学校が増える中で6クラス規模でよく維持している。過去、平野高校は危機を何度も乗り越えてきた。コロナが明け、全国ビオトープを中心にした、環境、福祉教育に取り組みば充分改善が見込めるはずである。

Q私学授業料無償化、学区撤廃によって、現在の大量に合格にさせる私学優遇措置を転換し、京都のように公立存続方針はとれないか。

A 京都も同じように統廃合をやっている。時間切れです。

後援会会長 本日のやりとりを含め、平野高校の思いを教育委員会議へよろしく伝えていただきたい。

教育委員会の通知と見解の問題点

●8月29日 平野関係者に突然の発表だ。

○今回の機能統合の発表は、事前に説明責任を果たさず、一方的に教育委員会見解をつけられた。とくに、再編整備課とのやり取りは全く行われていない。

「機能統合」とは、今回、「平野高校の特色ある取り組みを松原高校に継承・発展させる」ならば、何を具体的にどのように。具体的な話は一切されていない。

「募集停止」「平野」の校名がなくなる、実質「廃校」ではないか。かつて、「統廃合」から「再編整備」に言い方が変わった。どんなに言い方を変えても1校は「廃校」になっている。

●昭和62年度資料を用いて、あたかも中学卒業生数の減少が原因のように。

○「減少していない」平成21年～増、平成26年～減。平成31年は、平成21年とほぼ同じ。また、令和3年から微増し令和8年まで横ばいである。

わざわざ生徒減少期が始まったデータから「生徒数は減少」を強調し、過去も将来も「減少」を理由に、募集停止をせまるのは全くの理不尽だ。

●平野高校の現在登校している生徒たちの行政区の生徒数減を主張。

○平野高校の通学区は府下全域で、限定するのはおかしい。旧7学区「通学区」をあげるのであれば、太子町、富田林、大阪狭山市、河内長野市、堺市美原区、そして、行政区東住吉区が抜けている。平野の環境、福祉、ビオトープや30人学級の取組は大阪府を代表する特色ある学校だ

●「改善の見込みがない」の判断は、定員割れと中学卒業生数の減。

○2010年3月1日、元橋下徹府知事も、30人学級による転退学数の激減を知り、「素晴らしい学校」と評価された。生徒に寄り添う指導は現在も引き継がれ、保護者、中学校の先生にも高く評価されている。全国最大級のビオトープを中心にした、交流活動は時代を超えて、平野高校を活性化させるものであ

る。ここ3年間の、定員割れの数字のみでは、平野高校の底力はわからない。

●コロナ禍の特殊事情も一切考慮しない。

○2020年に始まったコロナ禍は3年に及ぶ。初年度は、何度も休校となり行事もことごとく中止になった。もちろん、体験入学、オープンキャンパスもである。3年生は3年に及ぶマスク生活、そして、母校がなくなる。

2009年11月22日、故生野照子教育委員は平野高校を視察され、授業見学、ビオトープ見学、各担当者のお話を丁寧に聞き、取組を高く評価された。教育委員会として、ガンバッテいる学校を支援しようとする姿勢がみられた。

(定員割れの原因)

昭和62年から平成22年度まで、入学者選抜にかかわる公私間の調整が行われ、定員割れはほぼ1けたに抑えられていた。ところが、2010年(平成22年)授業料無償化、2011年(平成23年)公私間比率撤廃、2014年(学区撤廃)などにより、定員割れが増加の一途をたどり、公私間比率は限りなく5割りラインに近付いている。

平野高校だけでなく、多くの公立高校が定員割れする背景には、私学に対する規制が効かなくなったことに起因している。私学では、定員(専願、併願)をオーバーして、合格者を出す学校が大半だ。実力よりも高い公立高校を受験し不合格になっても、「併願」(私学)の受け皿がある。公立の大量の不合格者と定員割れする学校と2極分解しているのである。教育委員会の私学優遇政策と高校間格差を助長する教育政策が起因し、年々格差は拡大している。

2010年、エルハイスクールには約1000万の特別予算が付いた。2011年以降、平野高校に手厚い予算配分されたことがあるだろうか。定員割れの度に、学校予算、人も減らされ、学校規模は縮小されたのだ。

(改善の見込み)

平野高校は危機を何度も乗り越えてきた。1994年に着任された故田中忠士校長が校地に有った沼地からヒントを得て、環境・人間福祉コース、学校ビオトープを中心にした、幼、小、中、地域との交流活動を行い蘇ってきた。この11月4日恵我小学校の児童たちがビオトープを訪れた。全国で最大級の平野高校のビオトープは、全国のみならず、海外からの視察も有った。平野高校に入学する生徒は、様々なハンディを持つ生徒に対して、生徒の実態を把握して生徒に寄り添う指導が定着し、保護者、中学校に信頼されている。29日に実施された文化祭では、少人数の部活ながら、書道等の力強い展示作品、エネルギッシュなダンスやバンド演奏。創立当時の新設校の中で唯一文化祭を開催したたくましいDNAは脈々と引き継がれている。

また、この「平野高校を廃校にしないで」の要望書、メッセージなどで平野高校の力強い応援団が存在することである。10573人の同窓生、後援会、旧現PTA、旧教員約600人、地元小中の旧、現教員、福祉施設、中小企業同友会、環境、ビオトープ関係者である。教育委員会は今回の機能統合案を白紙撤回し、公私間調整を復活させ、再編整備計画を練り直すべきである。現場の生徒、教員、府民の信頼を取り戻す努力をすべきである。

(翌日毎日新聞の記事になりました) 後援会会長奥田弘幸さん

「平野は校内に豊かな自然環境を擁し、きめ細やかな指導で保護者や生徒からも評判も上々だ。改善が見込めないといううのは乱暴な議論だ。」

【第三代校長 三谷 鎮哉】

平野高校の教育のなかでも、とくに「環境・人間福祉コース」の設置は、従来の高校教育に類を見ない、平野高校独自のユニークな取組として、今後とも継承発展させるべきものと思います。

教育が、「費用対効果」の効率性で捉えられるのではなく、高校進学を志す若者の将来性を担保する場として機能することが望まれます。

【大阪自然環境保護協会会長】

【名古屋大学名誉教授 夏原由博 (京都大学博士・農学)】

「日本で最大規模の学校ビオトープも失われる危機に瀕しています」「大阪市は我が国の政令指定都市の中でも緑比率が低く、大阪市緑の基本計画において、緑被地の量的拡大は困難であるが、様々な方法でみどりのベースアップを図ることとしています」「平野高校のビオトープは、人と自然がふれあう場として、また、生物多様性の拠点として、現在のままで存続されるべきものです」

【吉川憲司 (体育1999年～2007年)】

サッカー部に所属していた Nくんが採用試験に合格して A高校に勤務している事も喜ばしいことです。『卒業式のときの生徒の笑顔』が平野高校の存在価値だとおもいます。

【山崎功典 (美術2004年～2010年)】

定員割れが3年続く学校は「行きたいと思う人が少ない学校」ではありません。「それでも存在が求められている学校です」公教育とは何なんでしょうか？

【大川真理 (書道2007年～2021年)】

教育とは、人と人が出遭い、もがき、お互いが成長し合って学びとなります。それが、公立の使命なのではないのですか。平野高校は大阪の宝です。それをなくしたら、大阪の損、恥です。どうぞ、安易な数の理論に負けず、ご検討をお願いいたします。

【岡山美保子 (現学習指導員・元PTA会長)】

総合学科でもなく、エンパワーメントでもない普通科の平野高校が今後必要な存在です。今一度平野高校をなくすことを考え直していただきたいと心から深く願います。

【元PTA会長 竹内寿子 28期生】

息子が平野高校では大変お世話になりました。3年間の平野高校での生活先生方の寄り添う教育で平野高校卒では無理だと言われていた職業。先生方のお陰で何度も試験をチャレンジし、今は消防士として市民の皆さんを守っています。試験に合格するまで先生方は色々な手助けをしてくれるそんな平野高校です。地域の子ども達には、家庭環境が良くない子ども達がたくさん居ます。勉強のしんどい子ども達もいます。私立無償化になってもやはり私立はお金がかかります。そんな子ども達のためにも公立高校の平野高校を残して頂きたい気持ちでいっぱいです。